武家の古都・鎌倉塾◇第１回講演要旨

「鎌倉幕府はなぜつくられたのか」

講師　関　幸彦さん（日本大学文理学部教授）　　2008 年 5 月 10 日　於：鎌倉芸術館　会議室

鎌倉幕府はなぜつくられたかという問いには、百人いれば百通りの回答がある。歴史学というのは５Ｗ１Ｈの基本的な事実認識を前提にして、その広範な部分を解釈していくということなので、今回の私の話も私なりの解釈であり、確定されたものではない。文献史学の立場から、鎌倉の幕府、あるいは鎌倉の政治権力体が日本の中世、日本の歴史全体のなかでどういう位置を占めたのかという、甚だ漠然とした大きなテーマのなかでお話しする。

＜至尊と至強＞を朝廷と幕府で分った日本の中世

武家政権を日本の歴史が持った幸せと不幸、その両方の側面を見ていくとき、私はどちらかというと鎌倉幕府の独自性、自律性を評価する。中国や韓国は、皇帝という一極集中型の権力体で構成されている。＜至尊と至強＞はかつて福沢諭吉が用いた表現だが、中国や韓国はこれが一人の皇帝に収れんされている。ところが日本では、至尊としての天皇と、至強としての最も強大な武力を持った将軍がイコールではない。これが武家政権を持つにいたった日本の政治構造の特徴である。

２つの権力構造をもつ双軸の楕円国家へ

別の言い方をすれば＜至尊と至強＞が分裂していく、という経過を鑑（かんが）みたとき、日本は 10 世紀から 12 世紀の間の 200 年間の時代を経過する間、畿内を中心にした天皇を軸にした同心円状の権力をもった国家であった。しかし西と東の水圧がほぼ均一の形で平均化されてくる場面が現れる。西高東低という古代国家のありようというものが、10 世紀以降、徐々に変質をきたして、鎌倉殿という一つの王が東国に誕生し、この王を中心にしながらもう一極の政治的磁場が鎌倉を軸にして成立した。依然として京都には天皇を核とする磁場を持った貴族を中心にした政権が同心円的渦巻きとして在り、同時に鎌倉を軸にしながら、東国の方の鎌倉殿を王とする一つの王権集団が、同心円的に渦巻き状に回っている。ということは、日本は京都を中心とする磁場を持った公家の権力体と、鎌倉を磁場とする武家の権力体がふたつあったということで、ここに双軸の楕円国家が誕生する。楕円国家という、隣の中国や朝鮮とは異なる国家権力のスタイルというものを、わが国は体験することになる。

京都との距離感を置くことにより武家政権を確立

鎌倉幕府はなぜつくられたのか。鎌倉幕府の評価はふたつある。鎌倉幕府を公家政権の体制内での、あくまで侍大将としての位置づけ、小さな軍事権門としての位置づけ。もうひとつは鎌倉幕府を一つの小国家、地域の自己主張を兼ね備えた独自の権力体とする見方である。

頼朝は鎌倉を拠点に政治権力を高めた。なぜ頼朝は京都に行かなかったか。頼朝は 13 歳まで京都で過ごしている軍事貴族だ。武士という草深い農村から出発した人たちの御輿（みこし）に担がれた。そういう存在だから、頼朝は汗水たらして開発領主になり、武士になったわけではない。頼朝は、武家が京都との距離感を持ちながらどのような政権を作っていくかを考えていた。鎌倉というこの場所に拠点を据えながら京都との距離感を保とうとした。その適当な距離感が鎌倉の幕府に自律性を与えているという側面がある。頼朝は、独裁的なカリスマ性を持つことによって、鎌倉殿という自己を調教し磨きあげていく。その際、最大のポイントは官職にからめとられないということであった。

日本最古の築港跡・和賀江嶋

朝廷からの官職の呪縛を断った頼朝のカリスマ

官職は非常に魅力的である。頼朝は武士が京都と自分を通さずに直接的に結びつくことを厳しく禁じた。鎌倉幕府は、構造として京都との関係においては、官職との距離感をもっていた。鎌倉幕府の自律性と